

大楽毛物語

①



写真/釧路湿原

本州などからきた人たちに「大楽毛」の地名を見せて、「何と読むかわかる？」と問いかけると、決まって我こそは言い当てるやろうと近寄ってきて、「ウーン」と考え込む。「だらつけ」と大きな声。続いて「だらくもう」「……」。こちらにすれば、謎かけに引っかけ、満足な答えが出てこない優越感に瞬間浸る時である。

「大楽毛」は、北海道の地名に多少心得がないと決して読めない地名の一つだが、これほど「原語」に近い当て字はないのだそう。アイヌ語で「オタノシケ」はOta Noshike、「砂浜の中央という意味だ」という。釧路から西に向かつて白糠まで続く見事なまでの「砂浜」は、車窓からも伺い知るところ。大昔ならきつと海岸沿いに

ここを歩いたことだろう。ゆるくカーブしつつ広がる大地。アクセントといえば「大楽毛川」が流れているだけの、まさに平凡な平坦地である。「秋になるとさ、シシヤモの大群があがつてさ、警察の目を盗んでよくとったよな」と、少年時代の「悪さ」を得意気に話すのは、もう年老いた○○さん。満足な食生活でなかった終戦後、天はこの地域の人たちに自然の恵みを与えた。警察だつて見て見ぬふりをしなければならなかった、貧しい時代の話である。

釧路がまだ「クスリ」と呼ばれていた時代、住んでいたのはアイヌの人たちだ。17世紀の中頃、250年も前にその記録がある。日本の北辺を脅かすロシアの南下政策は、幕府の頭を痛めていたところ。明治となり、仕事を失った「サムライ」や農家の次・三男たちには、行きどころを求めた時代

だ。「えぞ地」から「北海道」に変わったばかりの未開の地は、彼らの目指すところでもあった。「北海道に行つて、一旗あげてくんべえ」。「そんな簡単にいくべか」。不安がなかったといえようぞだ。しかし「ここにいたつてどうしようもねえーべや」。中村英重著の「北海道移住の軌跡」(高志書院)を読むと北海道新聞(今の北海道新聞)の記者2名が、北海道移住勧誘の「遊説日誌」をしたためている。これを読むと当時の移住する人々の苦悩の歴史がよくわかる。中国から日本へ密入国させる「蛇頭」ではないが、あくどい移民船のワナに引っかけり、途方にくれた移住民の記録もある。釧路の漁場長だった佐野孫右衛門が東北、函館などから174戸、637人をよび寄せたのが、釧路のはじまりとされている。まず漁業についたの

(つづく)

北海道新聞

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン

0120-464-104

または右記販売所へ

(有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228